

ブレードランナーの夢と悪意

—ブレードランナー—

04

園田道夫 (情報処理推進機構 / サイバー大学 / 中央大学)

基
般

映画「ブレードランナー」とは

ブレードランナーの続編が作られるという。しかもハリソン・フォード (Harrison Ford) の出演が決まったというニュースが流れていた。ブレードランナーの謎めいたラストのその後を考えるファンたちの間では、ハリソン・フォード扮するデッカーも実はレプリカント (アンドロイド) だった、という意見が根強かったが、33年ぶりの続編に老境に入ったハリソン・フォードが出るならそうではなかったのか。それとも単に寿命が設定されていないだけなのか。

あの映画は、4年しか寿命がないレプリカントの葛藤と生命への渇仰、自身がレプリカントであることを知ったレイチェルの自己喪失、あまたの偽物が本物を凌駕するなど (たとえばレプリカントは人間の各種能力を遙かに上回っている)、映画と原作小説の筋立てはかなり異なっているが原作者のフィリップ・K・ディック (Philip K. Dick) らしい現実のゆらぎ、不確かさが主なテーマだった。スター・ウォーズ 2 作目公開後のある種能天気とも言えるスペース・オペラトレンドから大きく離れた、大気汚染が進んで晴れることがない 2019 年のロサンゼルスが舞台のこの暗い映画は、公開当初の不入りはあったもののやがてカルトの人気となり、のちの映画やアニメ、マンガに大きな影響を及ぼした。

新宿歌舞伎町をモデルにした日本語が並ぶ雑然とした街並みはこれまでの SF にはなかったイメージで、公開前年からのちにサイバーパンクと呼ばれる潮流の作品群が多く作られたが、その先駆けとも言える作品である。もともとはフランスのバンド・デシネ^{☆1} 作家メビウス (Moebius) の世界観から来ているものだが、この映画はそのイメージを圧倒的なリアリティで我々

☆1 ベルギー、フランスでのいわゆるマンガの呼び名。

に植え付けた。大友克洋の「AKIRA」は映画公開と同じ年の 12 月に連載が始まったが、舞台はブレードランナーと同じ 2019 年、スラム街と化したネオ東京である。そのイメージは酸性雨の降るロスと似ている。

妙にクリーンになってしまった 2015 年の東京やロスは、これらの作品に示されたイメージからは遠い。もしかすると黄砂や排気ガスで日常的に濃霧がかかったようになっている北京の方が、2019 年のロスやネオ東京に近いのかもしれない。



『ブレードランナー』
＜数量限定生産＞ファイナル・カットブルーレイ版 FR4ME＜フレーム＞仕様ポリスピナー付き (2枚組) ¥5,980 + 税
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント

具現化したガジェット、 発達するアンドロイド

映画に登場するガジェットには軸が光る傘のようにすでに具現化されたものもある (ちなみに、日本髪で和装の女性が強力わかもとの宣伝をするビル側壁大ビジョンの映像が強い印象を残すが、映画制作前の時点で新宿のスタジオアルタはすでに開業し、外壁にあるアルタビジョンでは CM 動画が流れていた)。レプリカント製造元のタイレル社の超高層ビルにあるオフィス、光を調節する窓も、ビルの外装をすべるように上昇するエレベータカーゴも具現化しているし、写真 (画像) の解像度を上げるだけでなく 3 次元的に復元して隠されたデータを浮かび上がらせる技術もある。また空飛ぶクルマが 2017 年発売と報道された。

ロボット技術はここに描かれた通り、あるいはそれ以上に進化し、人間がなし得ないこと、危険な作業

を超高効率でできるようになってきている。人間と一体化した攻殻機動隊における「義体」のような応用も行われる一方、人間型でダンスをする ASIMO が登場し、さらには感情認識パーソナルロボット Pepper が発売された。未来の Pepper が人間的な外殻を持つようになると、人間とアンドロイドはデッカーとレイチェルのように恋に落ちるのだろうか。

そして現在の SF では、たとえばマデリン・アシュビー (Madeline Ashby) による「vN」という作品 (2013 年) では、人間に危害を加えないようにするための安全装置が壊れた主人公のフォン・ノイマン式自己複製ヒューマノイドが危険な vN (von Neuman の略) として、あるいは人間の支配から vN を解放する鍵として追われることになるのだが、ストーリー設定に映画「ブレードランナー」の直接の子孫のような思想を感じる一方で、すでにリアルに夫婦、親子として生活する姿も描かれている。人間の感情を模倣するアンドロイドが、人間同士のように感情の交流をし続けている姿は衝撃的ではある。「A.I.」, 「エクスタント」などスピルバーグ (Steven Allan Spielberg) の描く未来にも、それに似たアンドロイドと人間の共棲が描かれている。

感情、悪意を見分ける？

ブレードランナーと呼ばれる賞金稼ぎたちは、フォークト=キャンプ (VK) テストによってレプリカントと人間を判別している。これは感情を刺激することを意図したイメージを喚起する文章を提示して、瞳孔の状況をブレードランナーと呼ばれる監査者が見るテストで、チューリングテストの変種とでも言うべきものだが、チューリングテストのコンテストとして有名なローブナー賞の状況を見ていると、現実にはすでに人工知能がテストをクリアしつつある。これはつまり、知性的な受け答えの部分においてのみ、と限定はされるものの、人間は人工的なソフトウェアと人間そのものを判別できなくなっている、ということである。しかし、そもそも人間とアンドロイド、人工的な知能を、判別する必要はあるのだろうか？ もしかすると iPhone に搭載された Siri で遊ぶ現代の人間にとって

は、相手がアンドロイドであろうがなかろうが、意思疎通ができる同等の存在として認識できれば良いだけなのかもしれない。

「判別」について言えば、最大の難題が現実が転がっている。人工的な知能が人間の仕事を奪う、というやや暗い将来像も興味深いが、セキュリティを専門とする筆者にとってそれ以上に興味深いのはコンピュータウイルス、マルウェアの判別だ。マルウェアは今、巧妙に真つ当な目的のソフトウェアを模倣していて、抽象的な表現で言えば「人間によってインストールされる」「情報を収集する」「外部と通信する」という点において、真つ当なものとそれを似せたマルウェアは違いがない。マルウェア判別に関する研究開発はさまざま成されているが、年に数億の新種が発生するとも言われる圧倒的な攻勢の前にはかなり分が悪い状況が続いている。レプリカントと人間の判別はつまるところその個体の持つものが人工的な感情か否かである、と本作では示唆されているが、ソフトウェアの中に含まれる悪意を見極めることは、その見極めと近いものになるのではないか。機能的にはそっくりだが、そこに悪意があるかないか。人工的な感情か人間の感情かを見極めることができるなら、善意と悪意の見極めが可能になっても不思議ではないとするやや飛躍が過ぎるだろうか。

もしそれが可能だとして、いわゆるヒューリスティック分析のように機能面を掘り下げてバラしていけば悪意の特徴を抽出できるのか。あるいは、アルゴリズムによって学習させていけば、抽象的な悪意を可視化できるようになるのか。それとも VK テストそのままのように、人間が見極めなければならないのか。

マルウェアを見分けるための VK テストシステムが欲しい。筆者は今切実にそう願っている。マルウェアの見極めるべき「瞳孔」はどこにあるのだろうか。

(2015 年 5 月 23 日受付)

園田道夫 (正会員) | vp5m-snd@asahi-net.or.jp

サイバー大学 IT 総合学部教授。1999 年より情報セキュリティにかかわり、教育、講演などを主として活動する。ほかに情報処理推進機構研究員、セキュリティ・キャンプ講師、SECCON 実行委員等。